Osaka University Knowledge Archive

Title	懐徳堂講座講演要旨
Author(s)	都出, 比呂志; 子安, 宣邦; 井上, 俊 他
Citation	懐徳. 1986, 55, p. 69-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90664
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈懐徳堂講座講演要旨〉

日本学の新しい地平―昭和六十一年春季

懐徳堂春季講座は「日本学の新しい地平」というテーマで、五月二十六日から三十一日まで以下の七人の講師によって行なわれた。

▽日本文化起源論と考古学　都出比呂志

記紀神話の呪縛のもとにあった戦前の日本人起源論、弥生文化を日本の固有文化の開始点とする柳田民俗学からする日本文化論の検討。戦後、先土器時代の考古学上の発見、人骨研究の進展が日本人起源論に新しい局面を開く。また東アジア、オセアニアという広域での人類の進化、交流をあとづける人類学の展開がある。近来、縄文文化を日本文化の基層とする日本文化起源論が盛んであるが、それは縄文文化前の先土器時代について触れない。また縄文文化も東アジアの文化交流の中から列島の環境に適応しつつ展開されたものであることがとらえられていない。そして外来の影響を受けていないものとして固有性を発見しようとする、日本文化起源論の方法が検討される。

▽篤胤論―宣長的日本像の再検討―　子安宣邦

本居宣長と平田篤胤は近世国学を代表し、両者の師弟関係がいわれる。しかし両者は学問的性格を異にする。『古事記伝』に結晶する宣長の古代研究の方法、真理観を、『古史伝』等における篤胤のそれと対比して検討する。『古事記』を絶対視する宣長の古代研究の方法の特殊性が、篤胤と対比することによって明らかにされる。さらにその宣長の古代研究からもたらされる日本像の特質―外来文化・思想（漢意）と固有性という視角、無規定的な神の道、皇統としての実体化等が検討される。

▽遊びと日本社会　井上俊

ロージェ・カイヨワは遊びを通して社会を分析する視点を提出した。遊びの四類型、1競争、2賭け、3模擬、4目まい。日本人は昔からどのように遊んできたか。古代、中世、近世そして明治・大正の遊びを概観する。日本人は豊かな遊びの伝統をもっている。ただ比較的に発達しなかった遊びに「目まい」がある。日本人の個我意識との関係。遊びの伝統を有するにもかかわらず、現在の日本人は働き中毒といわれ、遊び下手といわれる。その傾向は近代以向の現象である。近代化―産業化―勤勉主義。遊びのあり方が、勤勉主義的な仕事へのかかわり方と相似する現在の日本社会における遊びをめぐる問題が検討される。

▽江戸時代兵学と現代　野口武彦

一、医学は戦争に似ている。一般論では応対できない、非常事態に対処する技術。杉田玄白『形影夜話』兵学書から重要なヒントをえている。二、兵学的思考、クラウゼヴィッツ『戦争論』。三、江戸時代兵学思想。江戸時代の兵学は歴史上まれに見る太平の時代の産物。しかもその時代は、戦争技術に差のある鎖国と開国時の戦争にはさまれている。兵学史は孫子の注釈

の歴史。主なものとして十種の注釈がある。ここでは山鹿素行『孫子諺義』、荻生徂徠『孫子国字解』、吉田松陰『孫子評註』を中心に論じる。四、「上兵伐謀。其次伐交。其下攻城」（孫子）の「交伐」の注釈をめぐって（素行と徂徠）。五、孫子から発する兵学概念、「虚―実」「奇―正」「勢―節」。六、兵学的思考から見た歴史と政治（徂徠『鈐録』）。七、「軍略」と「軍法」。個人戦で集団戦に対抗し、朝鮮の役で明軍に敗れる。敗因は軍法にある。八、危機的情勢の兵学。「散地」戦の思想。松陰の孫子解―孫子に何を読みこむか。

▽竜宮童子考―異人論の視座―　小松和彦

本講演の内容は本号に別掲。

▽外国人による日本語への視座　一、日本人の挨拶―タイ人との比較において―　マラシー・セーンニコーン

日本人の日常生活の中の様々な場面の始まりや終りにおいて、挨拶をぬきにしては人間関係が成立しない。タイ人は挨拶ぬきで、人間関係を行なうことはよくある。また挨拶の言葉や行動において日本とタイとでは様々な相違がある。

▽外国人による日本語への視座　二、中国人と日本人のコミュニケーション―応答勧誘の表現方法の違いを中心に―　劉建華

中国人と日本人の応答表現の違い（断りの場合の応答、食事の招待に対する応答、贈物に対する応答等）を調査結果にもとづいて検討する。次に勧誘表現の違い（食事への誘い方、お菓子などの勧め方等）を調査結果をもとに検討する。それらをもとにコミュニケーションのあり方について考察する。

（子安宣邦記）

西洋の歴史と文化―昭和六十一年秋季

トロイア戦争とその原因

松本仁助

伝承では、紀元前十二世紀前半において、トロイアの王子パリスは、スパルタの王妃ヘレナを誘拐してトロイアに連れ戻った。このヘレナを取り戻そうと全ギリシア軍がトロイアを攻撃し、この攻防が十年間続いたのちトロイアが陥落した。これがいわゆるトロイア戦争である。

十九世紀の古典学者たちは、このトロイア戦争とこれに続く騒乱を架空の物語にすぎないとしていた。しかし一八七〇年以降シュリーマンが、トロイア、ミュケナイ、ティリュンス、オルコメノスなどの遺跡から豪華な遺構と遺物を発掘したため、学者たちに、ホメロスの語る出来事は歴史的事件ではないかと思わせ、ギリシアおよびトロイアの土地を一せいに発掘させた。

この結果、学者たちは、ギリシアの伝承を歴史的事実と見なす者と架空の物語とする者にわかれ、いまに至るまでこれに関する論争が続けられている。

本講演では、トロイア戦争が史実かどうかということ、史実とすれば、トロイア戦争を戦ったのは如何なる種属であるかということ、また、線状文字Bの解読を参考にして、この戦争の真の原因が何であるかということを述べていく。

中世末期の宗教劇

江川　温

中世ヨーロッパはカトリック世界であるとよくいわれる。しかしひとくちにカトリック・キリスト教信仰といってもその内容はさまざまである。たとえば大学で神学を研究しているような知識人の信仰と、ささやかな願いごとのために聖像の前に額づく庶民のそれとは同列に論じることはできない。ここで問題にしたいのは中世民衆の生活や文化とキリスト教信仰の結びつきである。きわめて一般的にいえば、中世末期（十四、五世紀）はこの結びつきが固く、祭りの催物などの中に両者は融合した形で表現されていた。これに対しルネサンスを経て近世に入ると、社会の支配層と教養人は民衆文化を敵視・抑圧するようになり、教会もまた（旧教、新教を問わず）信仰の純化の名のもとに、民衆文化とキリスト教信仰との切断に努めるようになる。今回は宗教劇の上演を例にとってこの事情を解明してみたい。

教会の典礼の中で聖書のエピソードを演劇の形で表現することは十一世紀ごろから西欧各地で行なわれていた。これを源流としつつ、十四世紀末からは都市民の手による宗教劇上演が盛んになる。イギリスでは聖体の祝日における同職ギルドの行列から独特のページェント劇が発達した。フランスでは信心会、臨時に集まった有志、時には都市当局が主催者となって不定期に宗教劇を上演した。その中には巨大な舞台や観客席を備え、数日にわたって行なわれたものもある。民衆の信仰心に祝祭の喜びと都市民の一体感を結びつけたこの催しも、十六世紀後半には上流市民の支持を失って衰退し、いくつかの地方の農村にのみ伝えられて今日に至っているのである。

ジョン・ロックの寛容論について

塚崎　智

標題中の「寛容」は toleration（tolerantia）の訳語である。現代日本語の「寛容」は「心が寛大でよく人を受け入れること。過失をとがめだてせず人を許すこと」（岩波国語辞典）というほどの極めて一般的な意味で使われている。英語の toleration も日本語同様広い意味で用いられているが、しかし他方においてそれがしばしば「信教の自由」「異教黙認」等の意味をもつとされる（ランダムハウス英和大辞典）ことからも知られるように、本来宗教と関わりの深い言葉であった。すなわち、宗教上の見解ないし信条が対立し抗争している状況において、対立者に対して、自己の見解ないし信条を外的な力を用いて強制しないことを意味した。

このような意味での「寛容」の問題は、宗教の歴史と共に古く、とくにヨーロッパ中世のキリスト教世界においては「正統と異端」の問題という形をとったが、近代においては宗教改革以後、カトリシズムとプロテスタンティズムの対立、プロテスタンティズム内部における様々な分派の成立を背景に、問題はいっそう深刻化していった。

ピューリタン革命、王政復古、名誉革命の激動期を生き、自らも一時期オランダへ亡命せざるを得なかったジョン・ロックは、宗教と政治の問題に真剣に取り組み、「寛容」に関する古典的文章を残している。本講では、ロックの寛容論を、第一には彼の政治論との関わりにおいて、第二には彼の知識論との関わりにおいて、考えてみたい。

フランスの歴史と文学—古典主義時代を中心に—

赤木昭三

わが国でフランス文学というと、それは十九世紀以後の近代、現代文学のことで、それ以前の作家や作品は、ほとんど名前だけの存在だったといってもいいすぎではない。だが中世以来の長い伝統をもち、その間に数多くの傑作を生んだフランス文学の理解にとって、このような偏った傾向は大へん残念なことである。なかでもラシーヌ、モリエール、ラ・フォンテーヌ、ラ・ロシュフコーらの作品が、わずか数十年の間に続々と世に出た十七世紀の古典主義時代の文学は、フランス文学の頂点をなし、フランス人の文学的感受性や美的感覚に決定的な影響をあたえた傑れた文学である。今回はこの文学を、その時代の歴史との関連においてとりあげたい。

あらゆるすぐれた芸術作品は、特殊な一時代に生まれたものとして、歴史の刻印をつよく刻みつけられているが、また同時に、歴史を越えて「垂直に神につながる」面をもっている。そして永遠に変らぬ人間性を強調し、晴朗で調和に満ちた古典的形式美をそなえる古典主義文学は、たとえば十九世紀のリアリズム文学の場合と反対に、時代を超えた永遠に変らぬ文学の理想としてのみ讃美されることが多すぎたように思う。しかしこの卓越した文学もまたその時代の産物であることに変りなく、これをその時代の中に位置づけることを忘れた鑑賞態度は、往々にして作品の真の理解をゆがめ、アナクロニズムに陥る危険を孕んでいる。今回は古典主義文学のなかでも文学中の文学と目された古典悲劇の形成と確立をとりあげ、これと時代とのつよい関連を跡づけたいと思う。

ドビュッシーと海

谷村晃

フランスの作曲家、クロード・ドビュッシーの作品にヘラ・メール〉（〈海〉三つの交響的エスキス）という傑作がある。〈ペレアスとメリザンド〉（一九〇二年初演）で確固とした名声を獲得したドビュッシーが、更に新しい地平を模索して、彼

の真の様式を確立した作品が、この〈海〉であるといわれる。〈海上の夜明けから正午まで〉、〈波の戯れ〉、〈風と海の対話〉の三つの交響的エスキスからなるこの管弦楽曲は、一九〇三年から一九〇五年にかけて作曲された。

さてこの素晴らしい管弦楽曲は海を描いた描写音楽であろうか。それとも海の多彩な美に触発されて作曲した象徴主義的標題音楽であろうか。ドビュッシーにとって海は単なる描写対象以上の深い意味を持っているように思える。この音楽のなかには彼の欲求不満的幼児体験の海、青年期の孤独と夢想の海、そしてエンマとの激しい恋における愛と官能の海が渦巻いている。

西洋の音楽文化のなかでこれほど美しく海を描き出した作品は他にないであろう。しかしその美しさは悩み多い現代の芸術家の揺れ動く深層心理を反映して捉え所がない。またその潮騒は、世紀末から第一次世界大戦に向けて傾斜していく近代西欧社会の病める魂を内に秘めて、殊更に妖艶である。ドビュッシーの海との出会いのなかに我々は西洋音楽文化の現代への転回点を見ることができる。

ドイツの統一と明治維新

岡部健彦

一八七一年に国民的統一国家の建設をようやく達成したドイツと、その三年前の一八六八年に大政奉還、天皇統治へと移行した日本とは、ともに十九世紀末から二十世紀前半にかけて、国際政治上の重要な勢力となった。ことに日本は、この明治維新から積極的に欧米の文物を取り入れて、ヨーロッパ型の近代国家体制を形成することに専念するが、とくに国制（憲法・法律）、陸軍の軍制、学校教育制度をはじめとして哲学、医学、音楽など諸学科にわたって、非常に多くのものをドイツから受け取った。

こうした事情から、日本でも、またドイツでも、両国民は非常に似ているということが、しきりに唱えられたことがある。日本精神、武士道とドイツ魂とが並べられて、高く評価され、両国民の親近性が強調されることも、しばしば見うけられるところであった。

しかし、両国民、両国家は、他の諸国民・諸国家とはかけ離れて、本来的に近似しているのであろうか。この問題を解明することは、きわめて困難であるが、しかし両国・両民族についての理解を深めるための大きな刺戟にはなると思う。

このような観点から、十九世紀後半以降のドイツ史の発展を考察し、同じ時期の日本と比較してみたい。